

世界平和の祈りの原理

五井昌久

業生の人間が祈る祈りでない

世界が平和だとよい、戦争がないとよい、天変地異がないように、自分たちが幸福であるように、とは、正気の人である限りは想っているに違いありません。そして中には、世界が平和でありますように、戦争がありませんように、と時折りは神に祈っている人もあるでしょう。

しかし、そうした想いや、そうした祈りと、私の提唱している世界平和の祈りとは、根底的にまるで違っているのです。私の提唱している世界平和の祈りとは、そのような力弱い希望的想いや、懇願的祈りではないのです。

私の世界平和の祈りは、この地上人類の今日の苦難あるを知っておられた、大神様の分れであり守護の神霊の集いである救世の大光明に、私共人類の業想念、迷いの想念を、すべ

て投入してしまつて、救世主の大光明と、地上人類の分霊的光明とを一つにつなげる祈りなのであります。

ただいたずらに、願望的に世界平和を想つたりするぐらいで、この業想念に満ちている地上世界が平和になるわけがありません。また真剣に、真摯に世界平和の祈りをする人々があつたとしても、その祈りが、この地上世界の悪想念、悪行為を認めながらの祈りであつては、とうていこの世界が平和になりつこはないのであります。

私の提唱する世界平和の祈りは、業想念世界に生活し、業想念の行為で生活する人間がする祈りではないのです。業想念とは、この世には善もあり、真もあり、迷いもあるといふふうう一般の人々の考え方でありますが、私の祈りは、そうした考えを基にして、神に祈るというような祈り方ではありません。

神様の世界には不和や闘争などない、平和そのものなのだ、人間はそうした神さまの世界に、自分の生命の根源をおいているもので、神の分霊なのだ、だから、人間各自が自己が神の分霊であることを悟りさえすれば、自然に神の世界がこの地上界にもひらけてくるのだ、ということをも根底にして、世界平和の祈りをするのであります。

神様との約束言

世界平和の祈りは、私と神界霊界を貫く守護の神霊との約束言であつて、この祈りを祈りさえすればよいのだ、どのような悪業想念、所業の人であつても、世界人類が平和で……と唱えさえすれば、その人の周囲には、守護の神霊の大光明が輝きわたるのだ、それは唱える人の業想念でやるのではなく、人間内部の神の分霊と守護の神霊とのつながりによってなされるのであるから、ただ、世界平和を祈ろうと想いさえすれば、その想念がスイッチとなつて、内部の分霊の光と守護の神霊の大光明とが一つにつながつて、自己も光り、自己の周囲も光明に輝いてゆくのだ、いかなる雑念が起ろうと、否定の想念が起ろうと、守護の神霊につながるスイッチをひねりさえすれば、つまり、世界人類が平和でありますように

……と祈りはじめさえすれば、あなた自身の分霊の光が、守護の神霊の光明とつながり、あなたの業想念を破つて外部にその光を放射しはじめるのだ、自分の運命を悲観したり、自己の善い性質を否定したり、自己の能力を否定したりする想念があつても、それはそのまま、なんら世界平和の祈りに悪影響を与えるものではないのだから、ただ一途に祈る心になつていさえすればよい、と説いているのであります。

根本原理の要約

本来は平和であり、調和であるこの世界を、今日のような闘争にみちた世界、悪想念に満ちた世界にしてしまつたのは、地上人類が神のみ心を離れてしまつたからであるので、神を否定する想念、つまり悪や不調和を認める想念をも諸共に、神様の世界に投入させるための祈りなのであります。業想念を神様の世界に投入すれば、神様の世界は大光明の世界であり、調和した世界なのでありますから、地上人間の業想念は、太陽にとける雪のように解け去つてしまふのであります。

神様の世界をこの地上に現わす邪魔をしているのは、自己をはじめ人類の業想念、神性否定の想いであるのですから、この業想念を神様の世界に投げ入れて、この業想念に把われ

なくなってしまうえば、扱われなくなった人や場所だけ地上天国が出来るのです。それが人類全般にひろがれば、地上人類に大平和が出来るのです。

こうした根本原理を聞いた、あるいは読んだあとで、先生はそんなことをいうけれど、そんなことで世界平和が実現出来るものではない、と又否定してくる人もあるでしょうが、その否定が出たら、すぐその否定の想念を世界平和の祈りに切りかえてしまうのです。そうすることを度重ねることによつて、いつの間にか、その人の心は、世界平和の祈りを全肯定する立場で祈ることが出来、自己の安心立命を勝ち得るのです。

自己を否定したり、人類の完成を否定したりする想念は、神の力を度外視した、人間は肉体なりという立場からはうなづける考えであつて、私も肉体的立場としては、全否定の立場をとつているのであります。しかし、肉体人間の力を全否定した瞬間に、神の力、神の完全性を全肯定する立場に心を切りかえしてしまつているのです。

肉体人間の力では、この世はどうにもならぬ、という否定があつてはじめて、神の力に全託する世界平和の祈りが生れたのであります。

自己の力、肉体人類の力に幾分でも依存しながらの祈りで

は、とても世界は平和にならないのです。何故ならば、この地上界を救おうとして働いておられる守護の神霊団体、いわゆる救世の大光明が、そうした人間や、そうした人類世界では、その力を全面的に働かせるわけにはいかぬからです。

人間に働いている力が、すべて神の力である、という考えが根底にあれば、神をはなれた自己の力などというものがあつて、ということの誤りに気づかぬ筈がないからであります。このような真理に気づいた人が多ければ多いほど、守護の神霊の救援の力は強まってくるのです。

そのような、神一筋の人々を一人でも多くつくるための祈りが、私の提唱する世界平和の祈りなのであります。